

はこいりむすめ

館入姫

比那名居 ななひ

『読書は私たちに未知の友人をもたらず』

バルザックの言葉だ。書物は知らない世界へ誘ってくれるカギだ。そしてそのカギを無数に所持している図書館は未知への境界線といえるのかもしれない。

「君たちも四月からは最上級生となる。勉強も部活もそれ以外でも何か熱中できるものを見つけてほしい」底冷えしている体育館とは対称的に、熱い文句を学年主任は私たちにぶつけてきた。僕は、素っ気なく聞いているふりをしていた。

僕、相田霞^{あへ}は、「相田霞」を演じる日々を送っていた。本当の相田霞は、霞んで見えないどころか、存在しないように思える。

母親は「好きにやればいい」と言ってきた。放任ではなく愛情である。その証拠に、小さい頃から気になった習い事を多くやらせくれた。習字、ピアノ、水泳、絵画、華道、手芸クラブ……。しかし、これといって続かなかった。割りあい器用な僕に、指導者たちは「こうすれば間違いない」「あれは厳禁だから」と自分たちの思い描く型にしようと必死だったからだ。親が離婚して習い事の費用がかかることも子供ながらに心配していた。

費用が比較的かからない陸上部を選んだのもそのためで、意欲は皆無だ。ただ、体を動かしていると心まで気を向けられないことは塞翁が馬だった。考えなくてよいから練習メニューだけをやった。アドバイスは馬耳東風。僕は平和主義なのだ。あらぬ争い、いざこざは勘弁してほしい。

こんな僕が熱中できるものなんてどこにあるのだろうか。陸上部の僕だが、走るより逃げるのが得意にな

っていた。

春休みに入り、近所をランニングする日々。春風に吹かれながら蕾を膨らませている木々を見るのがとても楽しい。木々は誰に成長の仕方を学ぶのだろうか。

二キロ程走った頃、急に影が差しヒューツと冷たい風が肌を擦った。来る。

足踏みしながら、周囲をきよろきよろと見回すと塗装が取れ欠けている白い建物が目に入った。あそこがゴールだ。市内八位の足でバツと駆けた。

ポツ、ポツ。雨粒がアスファルトに吸収されていく。途端にザツと雨が地面を叩きつけた。

ゴールに着くと、そこにあつたのは電光掲示板ではなく、木板に『第三図書館』と彫られた看板だった。

雨はスタンドの歓声のようにワーワーと雨どいを叩いている。落ち着くまでは行けないな。プロスポーツ選手もこんな感じなのかなと浸りつつ窓の中を覗いた。

窓の中には、薄いオレンジ色の温かな灯りがポワツと咲いている。僕の家に近い第二図書館とは違い、コンパクトにまとまりアットホームな感じだ。

可愛らしい動物の掲示物が飾られている。奥の方にはカーペットのフロアがあり、そこには積み木やぬいぐるみが散らばっていた。

灰色の雲からゴロゴロと音が聞こえる。

「まいったな……」

瞬間、雷が走った。

空にはない、僕の身体に。心の中に。

ぬいぐるみが散らばったフロアに静々と座る女性に目が釘付けになった。

ふわふわと生クリームのような白いフリルのワンピースを着た彼女は、窓に映る荒れた天気を憂いていた。まるで一国の王女が勇者を危惧するように。

窓に触れるか細い指、シュツと端正に伸びた首、玉のような白い肌、黒い艶のある長い髪、まつ毛が長く透き通るような瞳――。

「ま…いったな…」

しばらくして天気は収まったが、僕の心は落ち着くことはなかった。

次の日から第三図書館がランニングコースに入ったのは言うまでもない。

足が軽い。図書館までの道のりなんかあつという間だ。

さすがに窓に張り付くのは気が引けたので、外のベンチに休憩の体で座り、窓の内を探った。いらつしやった。

ティーシャツにデニムとカジュアルなスタイルの王女は、児童書コーナーにある椅子にただただ座っていた。本も読まずに掲示物に目をやったり、働いている司書さんを目で追ったりしている。

今の状況の僕が言うのも何だが、普通ではない。図書館に来ているのに本を読まないのか…。

ぼんやり思っていると、児童書コーナーで本を片づけている司書さんがこちらを見ていることに気がついた。僕は、わざとらしくゆっくり伸びをして、あたかも休憩を終えたようにその場を立ち去った。

「最近、やけに熱心ね」

母の鋭い言葉が刺さる。

「図書館に行くなら、これ返却してきてほしいんだけど」

ひょいと渡された小説の文庫本。栞代わりの紐が始めのページに引っかかっている。

「第二の本も第三で返せるみたい。ついでにこれ使えるか聞いてみたら」

貸出し用の図書カードだった。カードにはマジックが消えかけていて薄く『あいだ かすみ』と書かれている。

昔、つくったのだろうか、まったく覚えはない。自分のことなのに――。

「たまには体じゃなくて、頭をうごかすのもいいんじゃないかしらねー」

そう言うとき煙のようにふわっと台所に消えていった。いつもなら勉強しろという小言にとらえ眉をひそめただろうが、今日は煙たくない。僕は、足早に図書館に向かった。

今回は返却という任務があるゆえに堂々と図書館内に入っていく。

いつもは外から眺めるだけだったが、入ってみると思っていたより奥行があり、広い。また、外からでは感じない年月を重ねた本の匂いも鼻をくすぐってきた。これまでとは違う雰囲気を感じながらも目線は自然と奥の児童書コーナーに向いていた。

今日もいないか……。

この二日間、彼女はいなかった。

文字が薄くなったカードを手に僕は受付カウンターに向かった。

司書さんの説明のままにカードの更新をしていると、入り口付近にいる彼女が目に入った。

「あ！」

「何かお気づきですか？」

「あ、いえ、何でも…」

説明されているのに気もそぞろ。馬耳東風かつ、猫が獲物を見つけてお尻ふりふりの臨戦態勢だ。

「では、以上で…」

「ありがとうございました！」

説明が終わるやいなや、スタートダッシュを決めた。

周りをきよろきよろし、センサーを作動させる。

近くを通ったおじさんがギョツとした態度で僕を見たかと思うと、すぐに視線を逸らしてそそくさと新聞コーナーに向かっていった。

ダメダメ、欲望が溢れている。冷静になろう。ふーっと深呼吸をする。

いた！

彼女は一般書のコーナーから本を二冊取り出すと、学習室に向かって歩いていく。

僕も慌てて学習室に向かう。

彼女は一番後ろの席に腰かけ、バッグからごそごそと何かを取り出そうとしているところだった。

出てきたのは、ノートとペンケース、そしてキツネのぬいぐるみだった。

予想外のアイテムの出現に僕は入り口付近で固まったままだ。

僕をよそに、彼女はレポート用紙にぐりぐりと何かを書き始めた。だが、刹那、手を止めキツネに目をや

った。

カッソ。

彼女のペンが僕の方に運よく転がってきた。

僕はペンを優しく拾うと、彼女の方に歩みを進めた。心臓がドキドキする。いつものランニング以上の鼓動の高まりだ。

「あの…、これ…」

「え？あら…」

キツネに向けていた眼差しが僕に切り替わる。その綺麗な瞳に吸い込まれそうだ。

「あ、ありがとう」

にこっと天使のように微笑み、ペンを受け取る彼女。清楚な美貌から想像できない程、おっとりした幼い声色だった。可愛さの衝撃波に僕は耐えていた。

「か、かわいいですね」

時が止まる。

心は耐えきれなかった。僕は何を言っているんだろうか。自分を制御できなくなってしまっていた。

「えっ…。ああ、かわいいでしょ、この子」

彼女はキツネのぬいぐるみをよしよしと撫でまわしながら、少し恥ずかしそうに、そして嬉しそうに言った。

「ねえ、君はよくここに来るの？」

「え…。最近来るようになって…。でも、まだよくわかってなくて…」

目も合わせられず、しどろもどろに返した。

「私、常連だから分らないことがあったら聞いてね。あ、私、姫野結むすめっていうの」

「あ…。あ、相田霞です」

「霞ちゃんか。よろしくね。あ、そうだ。明日、読み聞かせがあるんだけど良ければ一緒に見ない？いつもさ—」

話の途中で彼女、姫野さんの動きが止まった。僕の後ろの方に目線をやっている。振り返ると本を抱えた司書さんがやれやれという感じでこちらを見ていた。

「あ、いけない！」

ペロツと舌を出し、ごめんねと両手を合わせ頭を下げた。あまりの破壊力に僕は倒れそうになったが堪えた。そして、絞り出すように声をかけた。

「お、お邪魔してすみませんでした。では、また…」

「じゃあ、また明日ね」

バイバイと手を振る姫野さん。

！。

これが夢見心地というものか。

ようやく僕にも熱中できるものが出来た。熱中というよりも「お熱」なのかもしれないが。ただ一つ問題があるとすれば、僕は『女』ということだけだ。

「この上着、変じゃないかな…」

今まで気にしなかったコーディネートに悪戦苦闘していた。着ていく服がなくて表面上ではいらいらしながらも、心のワクワクが止まらない。

「よし、これでOK!」

雑誌に載っていた『バッチリもて春コーデ』に似ている服を衣装ケースから引っ張り出した。熱中するのにも大変だ。

「いってきまーす!」

「…。ま、春だからね…。いろいろお気をつけて」

軽やかなスキップで外出する我が子を母は冷ややかな態度で見送った。

図書館までの道にある桜の木も満開状態だ。まるで僕の気持ちを表しているように咲き誇っている。

図書館に入ると姫野さんが手招きをしている。その手に僕は吸い寄せられた。

「わあ!なんかオシャレだねー」

「そ、そんなことないです。家にあつたものですよー」

言葉とは裏腹に心の中でガツポーズ。何でも苦勞が報われると嬉しいものだ。今までは苦勞とか悩むことを遠ざけていたし…。

「あ、そろそろかな」

児童書コーナーのカーペット付近には何人かの子ども、そして保護者らしき女性が集まっている。そこに司書さんがやってきた。

チリンチリン。

持っていたハンドベルを軽快に鳴らす。

「始まりの合図だよ。行こっか」

姫野さんに促され、読み聞かせの場所に向かった。小さい子や、そのお母さんたちの視線が僕の心を少し揺さぶった。場違いかな…と、思いつつも、姫野さんのワクワク感が溢れて少し口角が上がった横顔を見ると、もやっとした気持ち晴れた。僕たちは用意されていたソファアの丸椅子に静かに座った。

「あら、今日はお友達となの」

もう一人の司書さんが姫野さんに声をかけた。昨日、学習室でやれやれとしていた人だ。名札には「中島」と印刷されている。

「リア充ですから!」

ふんつと胸を張った姫野さんに対し、僕は気恥ずかしくて下を向いた。

「はい。それでは、お話しを始めます」

司書さんはスツと本を出し、読み聞かせを始めた。

読み聞かせの本は『はらぺこあおむし』だ。

有名な絵本だが、内容はあまり覚えていない。でも、一気に懐かしい気分になった。司書さんの包み込むような声も相まってとても心地が良い。

目の前の物を食べ、どんどん大きくなるあおむし。やがて美しいちやうになった。

僕もおおむしみたいにいるんなものを吸収して立派なちやうに成長していけるのだろうか…。

満たされた心に一抹の不安が顔を覗かせる。

ひょこつと姫野さんが僕の顔を覗く。

「どうだった？」

「なんか久し振りにほっこりしました」

姫野さんの屈託のない顔を見ると、不安が取り除かれる。余韻に浸っていると姫野さんが思慮深く話し始めた。

「サードプレイスって知ってる？」

「サードプレイス？」

「家、学校と違うもう一つの居場所って感じかな」

「居心地の良い場所って感じですか」

「私、この図書館が大好きなの。もうサード超えて、もはやファーストプレイスかも」

僕の持っていた図書館のイメージは、「禁止」「厳禁」の文字が所狭しと貼られている制限の多い場所だった。でも、実際に来てみると、落ち着いた雰囲気でゆっくりとした空間だし、読み聞かせや司書さんとのやり取りを見たり感じたりして安心できる場所だって思えた。

「僕もここ好きです」

姫野さんは満面の笑顔だった。

サードプレイス、いや、僕にとってはユートピアだと確信しながら顔を赤らめた。

新学期が始まり、僕は三年生になった。

春休みには毎日のように図書館に通い詰めていたが、新学期の慌ただしさで訪れることが出来なかった。

陸上も記録会が近く、せっかくの土日も練習三昧で心身ともにへとへと状態だ。それでも姫野さんのことをいつも考えていた。余程、感情が表に出ていたのか

「何、にやにやしてんのよ。気持ち悪い」

部活動のときに小畑^{おばた}が蔑みの口調で言ってきた。

「記録会近いから集中しなよ」

そう言うとき足を強く蹴り上げ走り去っていった。

小畑は小畑で熱中するものがあるのだろう。そういえば、小畑も顔立ちが整っていて綺麗だ。男子にも隠れて人気がある。でも、僕のセンサーは特に反応することは無かった。

同じリレー選手として、まあ付き合ってやるかと僕は軽くストレッチをし始めた。

「ぬいぐるみお泊り会？」

「そう！ね、一緒に参加しない？」

久々の図書館、もとい姫野さんに会えると気分が高まっていたが、僕以上に姫野さんはテンションマックスだった。

「大人も参加していいんだけど、中島さんに聞いたら大人って私だけらしくてさー」

お願いポーズをしながらグイグイせまってくる。いや、そんな上目遣いとか反則技ですからね。

詳細はこれ見と、A4サイズのチラシを強引に渡された。

『あなたのおともだちをとしょかんにおとまりさせよう』とポップ体で大きく書かれている。後は…。

「お、友達捕まえてんじゃん！」

司書さん―中島さんだったかな―が揚々と僕に近づいてきた。そして僕が持っていたチラシを指さしながら説明し始めた。

「タイトル通り、自分のぬいぐるみを図書館にお泊りさせるイベントなの。持ってきたぬいぐるみと一緒に読み聞かせに参加して、その後ぬいぐるみを寝かしつけて、図書館に預けていく。図書館でのぬいぐるみの様子はSNSにアップしていく予定だからぜひ見てちょうだいね」

「図書館でぬいぐるみは何するんですか？」

僕の質問に中島さんと姫野さんは目配せして悪戯っこのような顔をした。

「それは当日のお楽しみ」

二人だけ楽しそうな顔をしたので、思わずムツと唇をへの字にしてしまった。

「で、翌日にぬいぐるみをお迎えに来るの」

中島さんの説明を聞きながら再度チラシに目を通してしているとハツとした。

記録会と同じ日か…。

「で、熱はあるの？」

「うん、少しね…。それにちょっと…」

前傾姿勢でお腹を擦った。

「わかったわ。連絡しておくから、ゆっくり休みなさい」

わざとらしくあったかな…。今まではうまく演じられたのに今日はどうも調子が悪い。いや、体調は良いんだけど…。

「母さん、今日遅くなると思うから、夕飯先に食べてて」

玄関のドアがバタンと閉まった。

小畑にごめんのメッセージを送ると、すぐに返信がきた。

《あんたのぶんまでやってやるよ》

胸が痛む。僕にも良心の呵責というものがあつた。でも、僕の気持ちは揺るがない。集合時間までまだある。ごろりと横になって見た天井は、いつもより幾分遠くに感じた。

図書館に着くと、すでに十名ほどの子どもと親が並んで受付をしていた。

受付場所から少し離れたところで、姫野さんが、あのキツネのぬいぐるみを抱きながら待ち惚けている。

「姫野さん、お待たせしました」

振り返る姫野さんの笑顔は今日も素敵だ。だが、笑顔満開ではなく、八分咲きぐらいに思えた。

「お、遅れてすみません」

「ううん。全然余裕あるし。それに参加してくれただけで嬉しいよ。ありがと」

優しいトーンで話しかけられ、穏やかな気持ちになった。

「じゃあ、いこう!」

姫野さんは僕の手をギュッと握ると受付へ^{はっち}澆刺とエスコートしてくれた。同じ人間なのになんて心地良い手の感触のことか。ふわっとした甘い花のような匂^{にお}いも加わり、僕は図書館にも関わらず後少しで歓喜の発狂をするところだった。

司書さんがぬいぐるみお泊り会の流れを説明し始めた。子どもたちの純真無垢な眼差しが眩しい。

最初は読み聞かせだ。ぬいぐるみを抱えている子、横に座らせている子とそれぞれだったが、みんな大切そうに接している。後ろのソファ―椅子に座った姫野さんもキツネをギュツと強く抱きしめている。僕もバッグからクマのぬいぐるみを取り出した。

「うわー、かわいいねー」

「いや、あの手作りで…。不格好だから恥ずかしくて…」

「えっ！すごっ！」

付き添いの大人たちが振り向くほどの声だったのもあり、いろんな意味で僕は赤面してクマに顔を埋めた。

このクマのぬいぐるみは手芸を習っていたときに手掛けた。黙々と縫い、結構な大作となったこのクマは市の文化祭に展示された。ただ、展示されて以来、日の目を見ることなくしまわれていた。ぬいぐるみといわれて思い出したが、案外、近くにある良いものは普段目に入ってこないのかもしれない。手元にあるのもったいないことだ。

最初の読み聞かせは、紙芝居の『こねこのしろちゃん』だ。

黒猫の母親や兄弟と違って白色のしろちゃん。泥を塗って黒くしようとするが失敗。でも、父親の猫が立派な白猫であることがわかり、自信がついていく。

周りと違っても自信を持つか…。

僕も姫野さんと同じように抱えていたぬいぐるみをギュツと強く抱きしめる。クマの後頭部部分が硬く、丸い胸が少し痛かった。

「はい、次は『ねむい ねむい』です。みなさんもぬいぐるみさんを寝かしつけてね」

絵本の『ねむい ねむい』は、いろいろな動物が「ねむい ねむい」と言って眠りにつく、落ち着いた可愛らしい作品だ。

子どもたちはいつも親にされているのか、ぬいぐるみの背中をトントンしたり、頭をなでなでしたり。まるで自分の子のようなのだ。

後半では、司書さんの言葉にあわせるように子供たちも「ねむい ねむい」と声に出していた。

「はい おやすみなさい」

最後のページを閉じる。

用意されたタオルケットをぬいぐるみにかけて、ぬいぐるみとお別れのとぎが来た。

僕もクマにタオルケットをかけた。横にいたおさげの小さな女の子は離れたくなさそうにぐずっていたが、お母さんに諭され、しぶしぶウサギのぬいぐるみにお別れを言った。

女の子と同様に目を潤ませていたのは姫野さんだ。身体が反り返るほどギュッと強く抱きしめた後に、そつと優しくタオルケットをキツネにかけた。

「姫野さ…」

声をかけ終える前に、姫野さんは僕に抱き着いた。顔を僕に埋めている。鼻をすする音が聞こえる。僕の心臓の音も聞こえる。

周囲にいた人がいそいそと目を合わせずに散っていく。嬉しい、まずい、良い匂い、そうじゃないんです、何とかしないとー。

「あーあー、この女たらしがー」

混乱していると、中島さんが現れた。

中島さんに気づくと、姫野さんはターゲットを中島さんに変えた。
よしよしと背中を擦る中島さんには、女性としての先輩を感じる。

「お姫さん、キツネさんはこれから楽しいお泊り会なんだから笑ってあげないと。ね？」

「ま、まあ、そうなんだけどー」

埋めていた顔をむくつとあげる姫野さん。

「さて、これからお泊り会の様子をアップしていくから後は、お家で見えね」

「んー、でもうち回線あんまり良くないし、スマホデータも今月あんまりないんだよね…」

「あの…」

二人のやり取りに割って入った。

「ここが勝負時だ。僕が何とかしないとー」。

「これから、僕ん家に来ませんか？」

「おかえり」

玄関で迎えてくれたのは腕組みをした母だった。

「元氣そうでよかったわ。たくさん聞きたいことがあるから」

にこにこした顔が逆に怖い。

僕は、母猫に咥えられた子猫のように抵抗することなく首をもたげて、母の後について家に入った。その後をおどおどと姫野さんがついてきた。

リビングで椅子に座る三人。

「で、お隣のお嬢さんは？」

「わ、私、姫野結と言います。霞さんとお泊り会の様子を見ようと来ました」

緊張感からか微妙に説明が足りず、母は少し首を傾げた。僕は、図書館のイベントであるぬいぐるみお泊り会に参加し、その様子を一緒に見ようと姫野さんを誘ったこと、そして陸上の記録会を仮病で休んだことを母に伝えた。…と、思う―このとき頭が真っ白になってあまり記憶がない―。

話が終わると母はフツと息を吐いた。

「あんたがこんなに無茶するなんて初めてね」

ちらりと姫野さんに視線を送る。

「ひ…、結ちゃんだっけ。お家の人に連絡して。今日、相田^う家に泊^ちまっていいかって」

母はそういうとキッチンに向かった。

姫野さんは置物のように固まっていたが、慌ててスマホで連絡し始めた。

「あ、お父さん？あのね…」

僕は、そっとキッチンを覗いた。

「早く帰ってこれてよかったー」

鍋をコトコトさせながら、母は大きな独り言を言った。

「ん〜！おいひい！」

カレーを頬張りながらにこにこの姫野さん。

「こらこら、食べながらしゃべらないの」

母につんとおでこを突かれている。

図書館にいるときよりもずっと幼く見えた。これはこれで良く、嬉しい限りだ。いつも通りの家のカレーのはずなのに、僕はあまり味がしなかった。

夕飯の片づけを終え、リビングに戻ってパソコンを開く。図書館のページを開くと『お泊り会実施中』の文字が飛び込んできた。

投稿欄を見ると、『あんないちゅう！』のコメントとぬいぐるみたちに話しかける司書さんの画像があった。

スクロールしていくと、今度は『だいぼうけん！』と書庫の棚にリスとイヌのぬいぐるみが飾られていた。

「へー、こんな風になってるんだー」

常連の姫野さんも書庫の中を見たのは初めてらしく、体を前にのり出して画像を凝視している。

その後も、どんどんと投稿されていく。

ライオンとネズミが絵本と一緒に読んでいたり、ネコとタヌキがバーコードリーダーを持っていたり、フクロウが新聞を読んでいたり、本当に図書館を利用しているようだ。

「あら、可愛らしい。へー、こんな感じなんだ」

コーヒーを持ってきた母が画面を覗く。

「君たちもお昼はこんなかんじだったのかな」

「ちよっ…。反省してますから」

フツと姫野さんが口を押さえる。

「あ、私たちのだ！」

画像には、本を拭いているウサギを見守るキツネとクマが映っていた。

姫野さんは終始笑顔だったが、このときは、はしゃいだ笑顔ではなく、聖母を彷彿させるような微笑みだった。

しばらく、投稿が続き、ぬいぐるみたちのお泊り会は賑やかなものであった。そして、《ねむくなってきた》と横になるぬいぐるみたちの画像が投稿された。

「あ、そろそろ終わりかな」

「可愛いし、面白かったですね」

珈琲の跡が残るコップを横に置き、余韻に浸っていると、新しくコメントと画像が投稿された。

《おやすみなさい》

キツネとクマが寄り添ってソファに座っている画像だった。

「この子たちと一緒にだね」

ふと、見ると真横に姫野さんがいた。パソコンを見るため、次第に距離が近くなっていたのだろう。

「コ、コーヒー片づけてきますね」

僕は慌ててその場を後にした。今日のコーヒーはカフェインが強かったのだろう。眼が冴えて仕方がない。

舞踏会のようなときを経て、夜が深まった。

「ここで本当に良いですか？」

「うん、いいよ。いつもこんな感じだし」

姫野さんはゴロンと敷布団の上を転がった。

「霞ちゃんこそいいの？ベッド空いたよ？」

「お客さんを床に寝かせておいてそれは無いですよ」

横で一緒に寝たいんですと言えず、格好つけた言葉を返した。

「じゃあ、電気消しますよ」

電気を消し、ボフツと布団に仰向けになった。暗くて見えない天井をぼーっと眺める。

「今日は、本当にありがとう。すっごく楽しかった」

弾んだ声が僕の耳を癒した。

「いえ、こちらこそ急なこと言ってすみませんでした。」

「誘ってくれてよかった。で、ないと今頃は私一人ぼっちで寝てたんだなって」

寂しそうな声がして、僕は姫野さんを見た。まだ暗がりに目が慣れていないためか、ぼんやりとしか彼女の顔は見えない。

「いつもはね、キツネさんと一緒に寝るの」

「長い付き合いですか？」

「あの子ね、私の五歳のときの誕生日プレゼントなの。もう十年以上一緒」

「大切にしてるんですね」

「もちろん。あの子が来たとき、とっても嬉しかった。もう一人じゃないって思えた」

天井を見ていた彼女が、クルッと回転し、僕を見つめた。僕もジッと彼女を見つめた。

「私の両親ね、いつも忙しそうでなかなか構ってもらえなかったの。本当は甘えたいのになんか我慢しちゃってたし」

「僕も遠慮してたかな。なんか子供心と思うことってあるんですよ」

「え、あんな素敵なお母さんなのにもったいない」

「いやいや、今日は姫野さんがいるからですよ」

「ふふふ、お母さん大事にしなさいよ」

姫野さんはスッと息を吸い込んだ。

「たまにね、休みになると図書館に三人で行ったの。私ね、本を読むのが苦手だったからもしもじしてたの。そしたら、中島さんが『無理して本を読まなくてもいいんだよ』って言うてくれて。私、ぬいぐるみで遊んだり折り紙をしたりしてたの。そのキツネのぬいぐるみがお気に入り。それがあのキツネさん。母もよく『かわいいね』って言うてくれて…」

そのときの思い出を描くように、手を動かしながら話す姫野さん。

「その後、母が病気で亡くなって…」

えー。

「母が亡くなったときは、本当に辛くて、学校にもいけなかった。そんなとき、図書館を思い出したの。図書館の児童書コーナーに一日中いたこともあった。私にとって図書館はサードプレイスなの。いや、それ以上の場所なの」

今にも涙が溢れそうな目だ。だが、強い信念に満ちた目でもあるように見えた。

僕は、すぐには言葉を返せなかった。

「霞ちゃんが声をかけてくれたとき、すっごく嬉しかったんだ。あと、びっくりしたの。『かわいいね』って母と一緒にだったから。そのとき勇気がわいたの。今まで、図書館に籠ってばかり。キツネさんに頼ってばかり。母に立派になったねって思ってもらえるように――」

姫野さんの覚悟に対して僕はどうかだろうか。当たり障りのない自分を演じ、面倒のことから逃げようとしていたのではないだろうか。

読み聞かせに心を動かされた。お泊り会を心の底から楽しんだ。そして、そこで僕は熱中できる人に出会えた。その人は飾り気のない純な人だった。

造られていない、純朴で不器用な僕に出会える場所がそこにある。

姫野さんが横にいるドキドキと、未来これからの僕、「本当の相田霞」を考える複雑な夜が更けていく。

翌日、ぬいぐるみを迎えに図書館へ向かった。

「はい、ただいま！」

中島さんからぬいぐるみが手渡された。

短い時間なのに、とても長く離れていた気がした。そして、変哲もなかったクマを愛おしいと思えた。

姫野さんは強く抱きしめるかと思ったが、キツネににっこりと微笑み「かわいいね」と声をかけ、そっと優しく包み込んだ。

「あと、これもね」

ぬいぐるみの画像集と図書館の絵本を受け取った。

絵本は、姫野さんが『もちもちの木』で、僕は『きつねの嫁入り』だ。

「私が選びました」

ニタニタした顔つきで中島さんが言った。

本当にこの人は…。

今はぼんやりしていても焦ることはない。

造らない、ありのままの自分を信じて進むだけだ。

至れり尽くせりのユートピアではない。

悩んだり苦しんだりすることもあるだろう。

ただ、それを受け入れられる環境こそがサードブレイスなのではないだろうか。

特別だけど特別じゃない場所。

憩う場所がある、そして共に歩める人がいる。

姫野さんにはいつかー。

僕は今日も図書館に向かう。まだ見ぬ明日の僕に出会うために。

了

はこいりむすめ

館入姫

2025 年 10 月 25 日 発行

著者 ^{ひ な な い}比那名居 ななひ

令和 7 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

何にも熱中できずにいた
中学3年生の相田霞が、図
書館で見た姫野結に一目惚
れした。ただ一つ問題が
…。そして、二人は読み聞
かせ・ぬいぐるみお泊り会
と同じときを共有すること
に。不器用な二人の図書館
ストーリー！

